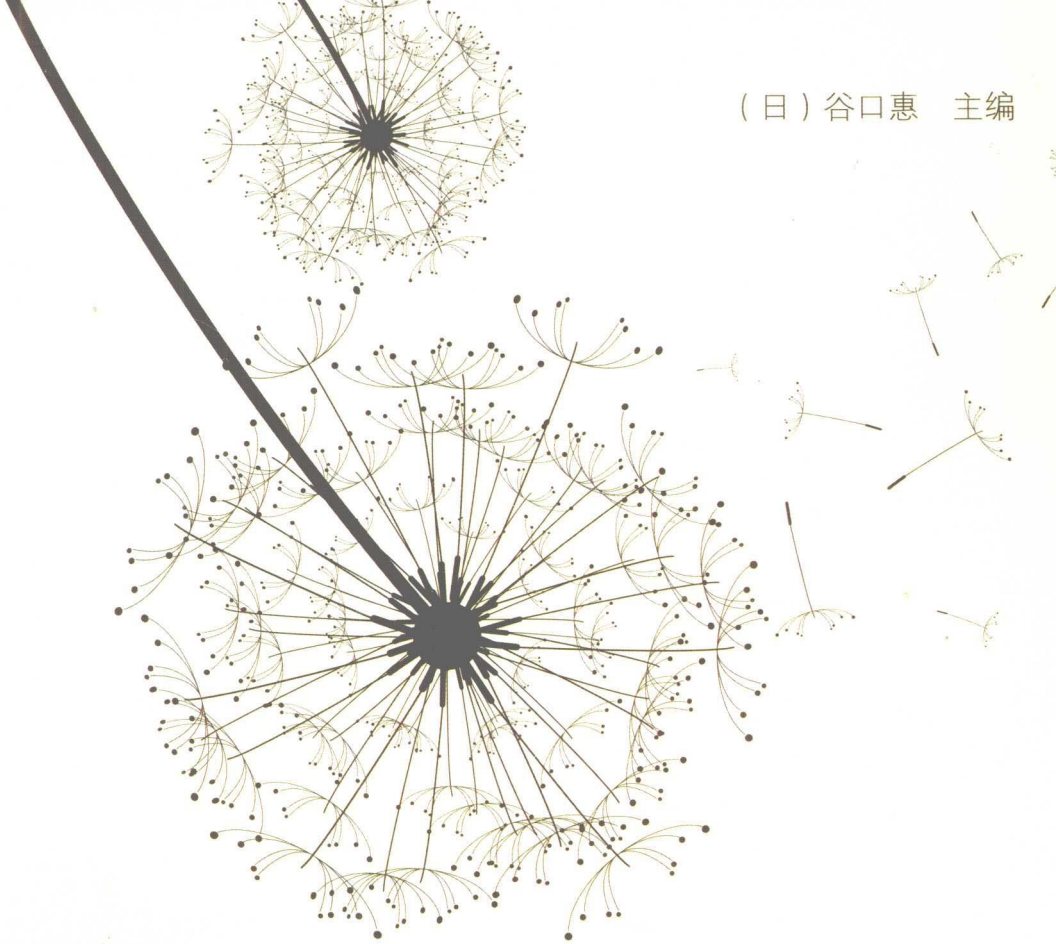
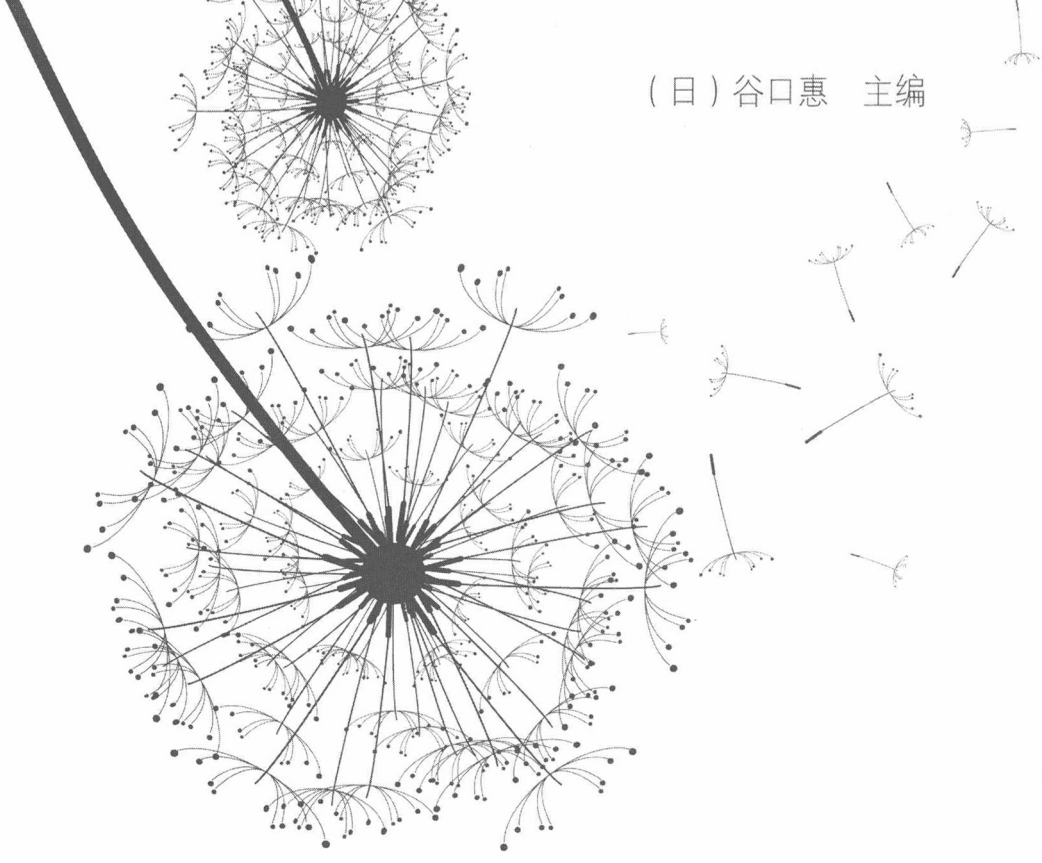
（日）谷口惠　主编



我在中国的日子

—40位日本人与你分享中国记忆

大连理工大学出版社



（日）谷口惠　主编

我在中国的日子

——40位日本人与你分享中国记忆

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

我在中国的日子：40位日本人与你分享中国记忆：日汉对照 / (日)谷口惠主编. — 大连：大连理工大学出版社，2012.8

ISBN 978-7-5611-7220-9

Ⅰ.①我… Ⅱ.①谷… Ⅲ.①日语—汉语—对照读物 ②散文集—日本—现代 Ⅳ.①H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字（2012）第193207号

大连理工大学出版社出版

地址：大连市软件园路80号　邮政编码：116023

发行：0411-84708842　邮购：0411-84708943　传真：0411-84701466

E-mail：dutp@dutp.cn　URL：http://www.dutp.cn

大连美跃彩色印刷有限公司印刷　　大连理工大学出版社发行

幅面尺寸：170 mm × 240 mm　印张：18.75　字数：320千字

印数：1～5000

2012年8月第1版　　2012年8月第1次印刷

责任编辑：海迎新　　责任校对：洪春子

封面设计：董振巍

ISBN 978-7-5611-7220-9　　定价：33.80元

はじめに

本書は、日中国交正常化40周年の記念の年にちなみ、日本人筆者40名が中国での生活のなかで起こった失敗談、恋愛談、旅行談をまとめた笑いあり、感動ありのエッセイ集です。

この筆者たちは、会社員、日本語教師、留学生、主婦など、中国各地で暮らしている、あるいは以前暮らしていた一般の日本人ですので、皆さんにより身近に楽しんでいただけるのではないかと思います。私自身も中国に15年滞在しておりますが、他の筆者の作品を読んで、初めて知ったことも多く新鮮な驚きを覚えました。

本書は、日本人筆者ばかりではなく、翻訳を手伝ってくれた日本語学習者の方々など、たくさんの人の手によって、世に送り出すことができました。特に大連理工大学出版社の逄先生、編集の海さんとは、本書の企画からテーマ選び、翻訳チェックまで、大変お世話になりました。あらためてお礼を申し上げます。

本書は日本語・中国語の両方で表記されており、日本語を勉強していない人にも興味を持っていただけるようになっています。本書を通じて、中国の皆さんが、日本語を楽しく学ぶことができ、また日中異文化コミュニケーションの理解に少しでも役立てば幸いです。

谷口恵

2012年8月

编者的话

提起2012，你会想到什么？当2012年刚刚向我们走来时，关于2012，我们想到更多的是那部灾难大片，那些流传着世界末日的谣言；当我们步入2012年的盛夏，心中留下的一定是体育竞技带给我们的快乐与感动，还有那充满激情与魅力的英伦风情。而2012对中国来说，还有一个更有意义的主题——中日邦交正常化40周年。

中国与日本是一衣带水的邻邦，两国的交往源远流长。自1972年9月，随着日本首相田中角荣的来访，中日两国宣布结束不正常的状态，正式建立外交关系。中日邦交正常化40年来，两国友好合作关系在不断排除干扰中取得了重要进展。

作为一位从事日语图书事业的出版人，我们也想在这特别的一年做些什么。于是，2012年年初，我们邀约40位在中国生活工作过的日本人，记录他们在中国的日子。

南起福建土楼，北至冰城哈尔滨，东起上海，西至青海。他们分布在中国的大江南北，从事着不同的行业。这里有教师、留学生、IT工程师、企业老总、音乐家、日本料理店经营者、茶道指导师、美容店经营者，等等。他们在这里讲述着在中国的遇到那些人，那些事。

他们在中国圆梦：梦想有一天，走遍中国大陆的每一寸土地，在每一个有日语学习者的地方传道授业，成为中国大陆的日语航海士；从日本最大的工厂所在地大田区听到所有厂长们频繁提起业务都在向中国转移，于是选择来到中国创业；本打算来中国治疗事故后遗症，却意外邂逅中国武术，由此与中国结缘；将日本传统文化的代表——茶道传授给茶之故乡中国的孩子们。他们的梦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

想在这里起飞。

他们在中国行走：当汶川大地震发生时，日本作为第一支国际救援队来到中国，我们感动于他们的人道精神。3年后，日本东部大地震发生时，中国同样派出救援队赶赴日本实施援救。就这样，大灾大难面前，我们不分国界，不分种族；景德镇陶瓷、福建土楼、杭州西湖，在这里，他们爱上这个如诗如画的中国。他们的脚步从这里开始。

他们在中国恋爱：在这里，他们邂逅了人生美好的初恋；在这里，他们拥有了自己的人生伴侣。尽管语言不同、文化不同，但是他们用各自的秘诀经营着自己的爱情与婚姻。他们的浪漫在这里诉说。

他们在中国惊喜：因为文字相近，所以我们沟通更顺畅；也正是因为文字相近，所以才会产生更多的尴尬瞬间。那句“我喜欢吃豆腐”笑翻酒吧全场；那半斤豆芽的分量让她瞠目结舌；中国白酒让他见识了万丈豪情背后的苦涩；同为使用筷子的国家，又有哪些不同的禁忌与说法？他们的故事从这里讲起。

读到这里，你是否好奇这本书究竟讲述着怎样的故事，那么，请翻开本书，与我一起走进他们在中国的日子……

最后，感谢本书的统稿人谷口惠女士，没有她，就不会有这本书的面世；感谢本书40位作者，没有他们，就不会有这么多优秀的作品呈现在我们面前；感谢本书的译者王帅、冯琳、俞洁丽、尹名玥，没有她们，就不会有同样精彩的中文再现。谢谢所有在本书的出版过程中帮助过我们的人们

编　者

2012年8月

目　录

我在中国圆梦的日子

2　夢は日本語航海士 / 梦想成为日语航海士

11　中国で茶道を指導して / 我在中国教茶道

18　大連と音楽との絆 / 我与大连以及大连的音乐之缘

25　チャイナシフトを目の当たりにして / 当日本的业务开始向中国转移时

32　瀋陽で過ごした初めての春節 / 在沈阳过的第一个春节

39　我が「青春」中国ライフ / 我把青春留在了中国

46　味覚の国境線 / 味觉世界的“国境线”

53　中国武術との出会い / 邂逅中国武术

60　ファン先生 / 黄老师

67　桜の木を福島に送ってもいい？ / 可以把门前的樱花树送到福岛吗?

74　大連IT産業の発展に向けて / 当我走近大连IT产业时

81　夕陽と音楽 / 夕阳与音乐

88　さあ、南京大学へ！ / 去南京读大学!

97　ネットワークによるborderless社会 / 网络时代的地球村

102　具体的な感動の内容 / 课堂上的那份感动

我在中国旅行的日子

110 四川大地震と中国人の優しさ / 四川大地震与善良的中国人

119 景徳鎮の旅 / 景德镇的陶瓷之旅

126 福建省の「土楼」の思い出 / 情系福建土楼

133 旅行で会った天使 / 旅行途中遇到的天使

142 滞在11年になってもまだ新発見が続く中国 / 旅居中国11年仍有诸多新发现

149 中国、万里の道をゆく / 行遍中国大江南北

我在中国恋爱的日子

160 初恋をくれた中国 / 中国给了我初恋

166 中国人の妻との結婚生活 / 与中国妻子的婚姻生活

172 日中結婚生活、何語で話す？ / 中日婚姻生活该用哪种语言?

179 中国で夢を果たせた喜び / 圆梦中国

186 婚姻で必要なのは「鈍感力」と「寛容力」 / 婚姻生活中的“钝感力”与“宽容心”

我在中国“惊”“喜”的日子

194 1斤はいったいどのぐらいの量なのか / 1斤究竟是多大的量啊?

200 十四年前の「満足」 / 十四年前的“慢走”

207 「豆腐が好き」 / “我喜欢吃豆腐”

214 中国の白い酒 / 中国的白酒

221 大連の街角にて / 大连街角所感

228 中国で風邪を治療した体験 / 我在中国治感冒

235 日中両国の球技に思うこと / 我看中日两国的球类运动

242 お箸は国のこともの / 我们都是用筷子的人

249 広州で「豚を売る」 / 我在广州经历“卖猪仔”

255 いろいろな思いをくれた大連 / 大连给了我许多新奇的记忆

262 私を助けてくれた中国の人たち / 那些帮助过我的中国人

269 中国にいる日本人教師 / 在中国的日语外教

276 青海と東京の学生の交流での発見 / 青海学生与东京学生的交流

283 お客様は神様とは限らない / 顾客不一定是上帝

我在中国圆梦的日子

夢は日本語航海士

笈川幸司
日本語教師
北京在住

大学時代、本気で何かに取り組んだことはなかったが、本気でやれば誰にも負けないという根拠のない自信に満ちていた。それまで漫才をしたことはなかったが、舞台に上がればすぐに天下が取れると思っていた。当時、ほんの一瞬、たった一度だけ本気のすぐ手前のところを生きてみたことがある。しかし、うだつの上がらない貧乏芸人の足元にさえ及ばなかった。政治家秘書時代は「仕事が合わないから辞める」と言うだけで済んだ。誰かに責められた憶えもない。漫才は「食って行けないから辞める」とひとこと言うだけで済んだ。

31歳、夏。天下取りの夢を捨て、中国へ逃亡した。青ざめた顔をぶらさげて北京空港に降り立った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北京に到着して数週間が過ぎ、夏期講習が始まった。その年の５月に北京の民間大学と契約を交わし、日本語教師になったからだ。資格も経験もなかった。ただ日本人というだけで大学の教師になれたから、何も考えずになったのだ。

民間大学は面白いところで、その日に使う教科書はその日の朝に手渡される。事前準備などできない。よほどのベテランでない限り、民間で教えるのは無理なのではないだろうか。

授業初日。校長をはじめ、学部長、副学部長ら教師陣がずらりと並んで、偉そうな態度で椅子に腰掛けていた。そんな中での初授業。新米教師が普通の精神状態ではうまく行くはずがない。しかし、僕は普通の精神状態でなかった。狂ったような、自暴自棄にはちょうど良い状態だった。うまく行くも行かぬもどうでも良かった。

90分、学生と一緒に声を張り上げた授業は大成功だった。その日、日本語航海士になるという夢を描き始めた。いつか、日本語航海士になって中国全土の民間大学へ行きたい。そして、自信をなくした若者たちを全員笑顔にしたい。

中国を、そして中国人を好きになったのは、一年間、ずっと僕の世話をしてくれたおばさんの存在が大きい。おばさんは僕が中国の大地を一気に駆け上がる秘訣を毎日ひとつひとつ教えてくれた。

中でも、いちばん身に染みてわかったのは、日本人にとってはなかなかできない——チャンスがきたら、何も考えずに飛びつくことの大切さだ。

仕事も収入もないときは、「それはチャンスよ。他の学校へどんどん行って、あなたの個性を発揮しなさい」と励ましてくれ、仕事が増えてくると、「民間大学だけでなく、一流大学にも行ってみなさい。きっと大丈夫！」と言って、さっそくある先生に電話をかけてくれた。ある先生とは、僕の人生を劇的に変える仕掛けをしてくれたお爺さん、趙文良教授だった。

ある日、北京郊外にある民間大学に趙先生が来てくれた。変な先生がいる（笑）といううわさを聞きつけ、わざわざ片田舎まで僕の授業を見に来てくれたのだ。

ちょうどその日は、周恩来総理のスピーチを全員で朗読していた。何人かの学生はこれまでちゃんと勉強してこなかったからか、なかなか流暢に読むことができない。

そこは勝負。「おーい、この長いセンテンスをみんなで100遍読むぞ！」と叫ぶと、全員が悲鳴をあげた。誰だって最初から流暢に読めるはずがない。20回くらい繰り返すと流暢に読める子がちらほら出てくる。50回くらいになると、みな余裕の表情になってくる。そこで、「あと50回！みんな、がんばれ！いいか、がんばれ！」と叫ぶと再び悲鳴が。

……97回、98回、99回、100回！！

最後のコールは、全員が心の壁を破ったときに発する一種の歓声に似ていた。はっきり言おう、偏差値など関係ない。語学は、繰り返しやれば誰だってマスターできる。例外？そんなものはない！

この日の授業が終わると趙先生が僕に、「いやあ、笈川先生は面白い。

これから、いいことがいっぱいあるでしょう！」とおっしゃった。

趙先生の紹介で、僕は清華大学の授業を見学することになった。教室の後ろにちょこんと座って、大人しく授業を見ていること20分、聴解授業担当の先生がいきなり、「皆さん、今日はゲストが来ています。笈川先生、お願いします！」とおっしゃった！

かなり緊張した。何を話したのか一切覚えていなかった。しかし、学生たちの多くは日本人男性を見るのが珍しかったのか、僕がひとこと言うたびに大笑いしてくれた。そして、あれよあれよと1時間ばかり話していた。

その日の夜、清華大学の日本語教研室から電話があり、「明日、もういちど来てほしい。採用の面接をしたい」との連絡があった。何の前触れもなく、突然、運命の一日が僕の目前にやってきた。

面接会場に入ると、まず主任から、前任の日本人教師が大阪大学の研究者、その前は早稲田大学政経学部を出た新聞記者だと紹介された。それを聞いた僕はうなだれた。

「あの、僕の出身大学は一流大学ではないんです……」

正直にそういうと、主任と副主任は顔を見合わせていった。

「いやあ、実は恥ずかしいことですが、私たちも一流大学を卒業したわけではないんです。私たちも二流です……」

お二人の出身大学名を聞いてみると、超有名大学だった。

「えっ、それで二流大学なんですか？じゃ、僕の出身大学は23流大学ですよ！」

そう叫ぶと、お二人の顔がゆがみ、口を思い切り押さえ、息を殺して笑いをこらえていた。

「ぷっ、23流大学！あっはっは」と、ときどき思い出し笑いをされながらも、終始暖かい雰囲気に包まれ、面接は無事円満に終わった。

その日、僕は清華人になった。

あれから10年、清華大学・北京大学では、試行錯誤しながらスピーチ攻略法、発音矯正法を編み出し、学生の努力もあってスピーチコンテスト優勝者を多数育て上げることができた。そして、イベント開催、HP立ち上げ、講演マラソンと、僕自身のステージがどんどん広がっていった。うだつのあがらなかった僕は中国で劇的に変わることができた。そこには、多くの奇跡的な出会い、日中両国の仲間の支え、僕の家族の励ましがあった。

そして、日本語教師として教壇に初めて立ったあの日、誓った日本語航海士になるという夢は今も変わらない。あと何年かかってもいい、僕は中国全土にいる日本語を学ぶ学生たちひとりひとりに僕の経験、気持ちを伝えたい。そしてあの時の僕と同じように自信を失ってしまった彼らに勇気を与えたい。

梦想成为日语航海士

大学时代，我虽然没有认真地干过什么，不过，那时的我一直有着一股莫名的自信，觉得只要自己认真想做些什么就一定不会输给别人。虽然我从未说过相声，我却觉得只要我登上舞台，就一定能博得满堂彩。当时，曾有过那么一瞬间，仅仅一次，我曾尝试过几乎是认认真真地生活。不过，我的水平可以说就连那些久无出头之日、贫困潦倒的相声艺人都不及。做政治家秘书时，我只说了句“这个工作不适合我”就辞职了。没有被任何人责怪。相声也是说了一句“这个行当不能维持生计，不干了”就结束了。

31岁，夏天。我放弃了夺取天下的梦想，逃到了中国。带着满面的憔悴降落到了北京机场。

到了北京几个星期后，我便开始了暑期讲座。因为那年的5月，我和北京的一所民办大学签约，当上了日语教师。既没有资格证也没有教学经验，只是因为我是个日本人就当上了大学教师，所以我也什么都没想就这么上了。

民办大学是个很有意思的地方，上课所用的教材在当天早上才会交到你手上。根本不能事先准备。如果不是特别有经验的人恐怕根本没办法在这样的地方院校教书。

上课的第一天，校长率领系主任、系副主任以及教师们并排坐在教室，其气势让人仰视。我就是在这样的气氛中上的第一堂课。作为一名新教师，如果是一般的心理状态，那一般是不会成功的。但是，我当时的心理状态绝不一般，是近似疯狂的，或者说是自暴自弃的，也已经顾不上讲得成不成功了。

90分钟到了。这堂和学生们一起喊出来的课大获成功。那一天，我开始勾画成为日语航海士的梦想。我梦想有一天能成为一名日语航海士，去中国各地的民办大学，让那些失去日语学习信心的年轻人都露出笑脸。

喜欢上中国、喜欢上中国人，大多是因为那位照顾了我一年的阿姨。她每天都一一教给我如何在中国土地上不断进取。

其中，我体会最深的是，当机会来临时毫不犹豫地冲上去是多么重要。而这一点日本人很难做到。

既没有工作又没有收入的时候，她会鼓励我："那是个机会！你多去几个学校，发挥你的特长。"当工作不断增加的时候，她又说："你不能只在民办大学待着，去一流大学试试。一定没问题。"于是，她马上给一位老师打了电话。那位老师就是戏剧性地改变了我的人生的老者——赵文良教授。

有一天，赵教授来到了位于北京郊外的那所民办大学。他说，听说有位特别的老师（笑），所以特地赶到这偏僻的地方来听我的课来了。

正好那一天，全体正在朗读周恩来总理的演讲。有几名同学从未好好学习过，所以总是读不好。

好，就看这回了！于是我大声说道："好！咱们把这个长句子读100遍！"全班同学叫苦连天。没有一个人能流利地从头读到尾。大概读了20遍左右，就有几位同学能流利地读出来了。到了50遍，大家的表情渐渐变得轻松些了。于是我又大声说："还有50遍，同学们，加油！好！加油！！"班里再次响起了一片叫苦声。

……97遍，98遍，99遍，100遍！！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com